

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 孫傳玲

論 文 題 目

山崎闇斎の神儒「妙契」論

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学教授	阿部泰郎
委員	名古屋大学教授	宮原勇
委員	名古屋大学准教授	佐々木重洋

論文審査の結果の要旨

「本論部の概要」

本博士申請論文は、江戸時代 17 世紀の朱子学派の儒学者にして神道研究者であった山崎闇斎（1618～1682）の中心思想神儒「妙契」論の研究である。神儒「妙契」論とは、神道と儒教はともに朱子学的な「理」の思想を体現しているが、神道は、儒教の影響下形成されたのではなく、自立的に形成されたのであり、結果として儒教の理の哲学と同一であったとする考え方である。闇斎は朱子学者としての立場を維持しつつも、儒教と神道の 2 元論的な平行進化論を提案した、と本論文は説く。このような神道論は、思想史的には江戸初期神道儒教両派が支持した神儒関係論「習合附会説」と対立する思想である。「習合附会」説とは、神儒関係は偶然な習合だとする理解である。しかし闇斎は、神儒関係は、宇宙唯一の「理」にもとづく神道と儒教の「妙契」である、とした。闇斎はしかも、朝廷と幕府の関係、日本と中国や朝鮮との国際関係という政治問題までも、「妙契」論的 2 元思想で論じるに至ったという。「妙契」思想は神儒関係のみならず政治思想にまでおよぶ、闇斎思想に一貫する思想であった、というのが本論文の主旨である。

本論はそれゆえ 3 部からなる。「第 1 部 山崎闇斎の朱子学と神道研究」では、仏教に入門後、朱子学に転じ、さらに神道研究にむかひに垂加神道提唱に至った闇斎の思想遍歴が、闇斎の幼少期から仏門時代、朱子学時代、神道研究時代の 3 期に分けて論じられる。第 1 期では闇斎が仏門を去った理由は、仏教の実践的倫理思想欠如に対する失望であったことを指摘し、第 2 期では崎門朱子学の特徴が中国朱子学との比較で論じられ、第 3 期では垂加神道が伊勢神道、吉田神道、忌部神道の批判を通じて形成される過程とその思想が明らかにされる。

そのうえで「第 2 部 山崎闇斎の神儒「妙契」論」が論じられる。妙契論の鍵となるのは、儒教と神道に共通にみられる神概念と中概念の理解だということ。闇斎は、神道における両概念の存在に、儒教と神道の根幹思想の一致を認識し、同時にそれが神道独自の思想形成であったとする。闇斎は「神」を儒教的な理気統合体として理解するが、神道でこれに対応するのが「天御中主尊」だとする。「中」も、儒教においては「未発の中」「君子時中」と表現されるが、神道では「天御中主尊」に体现される。「中」を論じた経典は、儒教に『中庸』、神道に『中臣祓』があるが、その根本にある理は一致している。こうして、闇斎は神道的「中」概念を、儒教的「中」概念の独自の展開だとみなす。

そのうえで「第 3 部 「妙契」論的政治思想」が論じられ、闇斎の「妙契」論は、神儒関係論にとどまらず、朝廷と幕府という国内政治関係論、中国、日本、朝鮮という国際的政治関係論にも貫かれ、朝廷と幕府の間、日本と中国、朝鮮間の間には、其々が自立的な原理を有した多元論的關係が存在するという政治論が展開された、という。

「本論文の評価」

本論文は、仏教、儒教、神道という異なる宗教思想の3分野にまたがって活躍した江戸時代初期 17世紀の思想家山崎闇斎の神儒「妙契」論の研究である。本論文の評価すべき点は、まず、3分野を渉猟して、神儒「妙契」論という独創的な儒教神道関係論を提唱した山崎闇斎の研究であることである。日本宗教思想史研究において、山崎闇斎の思想は十分とりあげられることがなかった。日本宗教史は、神道・民俗信仰、仏教、儒教、さらには道教、老荘思想などからなる多重構造を有し、その間には複雑な相互関係がある。しかしこの多重構造を通史的に読み解く研究はまだ不足している。かかる学史的背景をふまえたとき、仏、儒、神道を渉猟した闇斎という思想家を本論文で取り上げ、その神儒関係論の解明を試みた本論は、日本宗教思想史研究上の意義がきわめておおきい。しかも、神道儒教関係の研究はすくない。本論で示された神儒関係の「習合附会説」から2元論的「妙契論」へという神儒関係論の展開論は、この点だけでも、神儒関係論への多大な寄与である。

そのような闇斎の「妙契論」思想の発展を、本論文は、闇斎の幼少時からの思想遍歴を丹念に跡づけ、闇斎の朱子学、闇斎の垂加神道を丁寧分析整理した後、神儒「妙契論」を論じた。そこに見られるのは徹底した内在分析であり、そのことにより、朝廷と幕府関係論、日本をめぐる国際関係論にも多元論的な妙契論がおよんでいることを明らかにし、闇斎思想の全体が妙契論によって貫かれていることの発見に至った。このような多元論的政治思想が仏、儒、神道を渉猟した朱子学者によって展開されていたことの発見も価値がある。

闇斎の妙契論は、闇斎後のわが国の神道研究の発展を考える上でも興味深い。この問題は本論文では言及のない問題であるが、本居宣長の登場によって、古事記など漢字文化の背後に横たわる和文文化と国学の研究が活発化するが、それは、闇斎の妙契論が神道の自立的発展を論じたことにより、準備されたとも理解できるからである。

本論の分析と論述方法は明晰であり、論文申請者のすぐれた学問的能力を示すとともに、説得力ある議論となっている。論者によると、闇斎研究史は思想研究、比較思想的研究、徳川政治思想史にわけられるが、本論のように、妙契論の観点から闇斎思想を体系的に読み解く研究はまだなされていないという。ここに本論の闇斎研究の独創的価値があるが、闇斎研究は分野の異なった問題意識からなされた研究が少数蓄積されている段階であり、論者には、これらの研究と丁寧に対話してゆく作業が望まれる。しかし、本論文は、日本宗教史研究においても、神儒関係論においても、徳川政治思想史研究においても、今後議論を呼び起こしうる価値ある闇斎思想の独創的研究であるとして、審査委員一同、博士(文学)申請論文として合格とした。